

〈19-25節の構造〉

奨励の根拠 (19-21節)

- ・イエスの血により新しい生ける道が開け、大胆さ (確信) をもって神に近づける (19-20節)
- ・イエスは神の家を治める偉大な大祭司 (21節)

奨励 (22-25節)

- ① 神に近づく (22節)
- ② 希望の告白 (23節)
- ③ 集まることの励まし (24-25節)

1. 奨励の根拠～神の家の「入口」であり「主人」であるイエス 19-21節

19「大胆に聖所に入ることができます」

- ・直訳「聖所に入る大胆さ (確信) をもっている」
- ・聖所、至聖所には勝手に入ることが許されなかった。聖所には祭司のみしか入ることが許されず、至聖所には大祭司が年に1回、宥めの日にのみ入ることが許された。アロンの息子たちは勝手に至聖所に入ってしまったため、神に打たれて死んだ。

Lev. 16:2 主はモーセに言われた。「あなたの兄アロンに告げよ。

垂れ幕の内側の聖所、すなわち箱の上の『宥めの蓋』の前に、時をわきまえずに入ることがないようにせよ。死ぬことのないようにするためである。『宥めの蓋』の上で、わたしは雲の中に現れるからである。

- ・しかし、今やイエスの血によって誰もが聖所に入ることが許された。まさにそれは「大胆」なことであった。

Eph. 3:12 私たちはこのキリストにあって、キリストに対する信仰により、確信をもって大胆に神に近づくことができます。

19「イエスの血によって」

- ・幕屋においては、至聖所に動物の血を振りかけることによって民のきよめがなされた。

Lev. 16:15 アロンは民のために、罪のきよめのささげ物である雄やぎを屠り、その血を垂れ幕の内側に持って入り、この血を、先の雄牛の血にしたように、『宥めの蓋』の上と『宥めの蓋』の前にかける。

Lev. 16:16 彼はイスラエルの子らの汚れと背き、すなわちそのすべての罪を除いて、聖所のための宥めを行う。彼らの汚れのただ中に、彼らとともにある会見の天幕にも、このようにする。

- ・イエスの血がただ一度だけ流されたことにより、人は誰もがきよめられる。

Heb. 9:12 また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。

Heb. 9:13 雄やぎと雄牛の血や、若い雌牛の灰を汚れた人々に振りかけると、それが聖なるものとする働きをして、からだをきよいものにするのなら、

Heb. 9:14 まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者になることでしょうか。

20 「新しい」

- ・ πρό (前に) + σφάζω (屠る) の合成語。「新しく屠られた」、「屠られたばかりの」という意味。それから「初めてできた」、「今できたばかりの」、「新しい」という意味となった。
- ・ イエスが開いた新しい道は、今しがたイエスが屠られたことによって開始した新しさ。イエスが屠られたことによって切り開かれた神に至る道。

20 「道」

- ・ イエスという道が父なる神のみもとに導く道。

John 14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。

「ご自分の肉体という垂れ幕を通して」

- ・ 「垂れ幕」は神に至る「入り口」と考えることができる。宥めの日の大祭司に関する限り、この幕は障害ではなく、入口となる。そして、イエスの肉体も神に至る「入口」と言える。

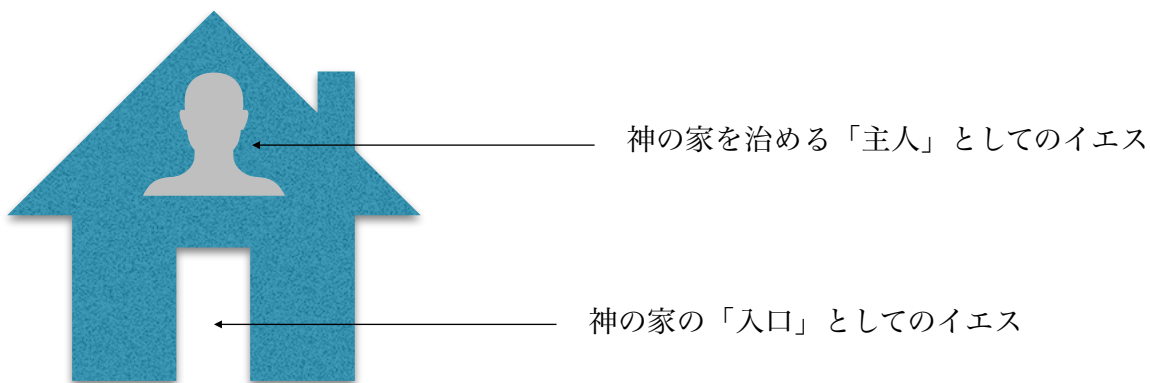
21 「神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから」

- ・ イエスは神に至る「入口」であるだけでなく、神の家（神の民、教会）を治める祭司でもある。神の家の「門」でもあり、その家を治める主人でもある。このことについてはすでにモーセとの比較をした時に言及していた。

Heb. 3:6 しかしキリストは、御子として神の家を治めることに忠実でした。そして、私たちが神の家です。もし確信と、希望による誇りを持ち続けさえすれば、そうなのです。

- ・ 4:14-16においては、イエスが人間の弱さに同情してくださる大祭司であると言及されていた。

Heb. 4:15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした。すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。



2. 奨励 22-25節

① 神に近づく 22節

22 「からだをきよい水で洗われ」

- ・ 洗礼のことか？

1Pet. 3:21 この水はまた、今あなたがたをイエス・キリストの復活を通して救うバプテスマの型なのです。バプテスマは肉の汚れを取り除くものではありません。それはむしろ、健全な良心が神に対して行う誓約です。

- ・ からだの洗いは心のきよめの外的な印である。

② 希望の告白 23節

23 「約束してくださった方は真実な方ですから」

- ・11章にも類似した表現が見られる。

Heb. 11:11 アブラハムは、すでにその年を過ぎた身であり、サラ自身も不妊の女であったのに、信仰によって、子をもうける力を得ました。彼が、約束してくださった方を真実な方と考えたからです。

・神が真実な方であるというのは、神は嘘偽りのないお方であるということ。言われたことは本当であり、信頼して信じてよいことだということ。高齢のアブラハムとサラに子どもを与えるという、常識的に考えれば全く信じられないことを神は彼らに約束されたが、神の約束は果たされた。それほどに、神の約束は確かなものであるから、希望が失望で終わるのではないかと、心配したり動揺したりしなくてよい。神の約束の希望は、時至って実現されるから、しっかりと告白を保ち続けようというアドバイス。

③ 集まることの励まし 24-25節

24 「促すために」

- ・新約聖書で2回（使徒15:39とこの箇所）

Acts 15:39 こうして激しい議論になり、その結果、互いに別行動をとることになった。バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行き、

- ・「促す」では意味が弱いのではないか。激励、鼓舞というくらいの意味。
- ・愛と善行は自然に生まれでてくるものではない。キリスト者の交わりの中で受ける刺激によって呼び起こされるもの。

25 「ある人たちの習慣に倣って」

- ・迫害を恐れて集まることをやめるようになったか？
 - ・再臨が遅れていることに失望して信仰の情熱が失われたか？
 - ・2世紀初めのローマにおいて家の教会の集まりが蔑ろにされた原因は、仕事への没頭であった（ヘルマスの牧者）。この当時も同じようなことがあったか？
- これらは可能性の域を出ない。実際に何が原因であったかは分からない。

「その日」

- ・「その日」は終末的な意味で使われている。主の再臨の日。

1Cor. 3:13 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。

2Tim. 4:8 あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。

2Pet. 3:10 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまいます。

- ・ヘブル書では主の再臨が待ち望んでいる信仰者の救いのためであると語っている。

Heb. 9:28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度ご自分を献げ、二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々の救いのために現れてくださいます。